Ⅱ－２　中学部の実践

Ⅱ－２　中学部の実践

１．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51

２．実践Ⅰ　作業学習（自転車の整備・点検グループ）
　　　　　「ベル交換をしよう」の授業作り　・・・・・・・・・・・・・・・54

３．実践Ⅱ　生活単元学習（ポップコーン製造グループ）
　　　　　「学習発表会でポップコーンを販売しよう」　の授業作り・・・60

４．まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68

Ⅱ－２　中学部の実践

１．はじめに

（１）中学部で目指す姿

児童生徒が、その子らしく精一杯生きる力を育てることをめざす本校の教育において、中学部の３年間を「集団の中で、他者を認めつつ、自己理解を深める時期」と捉え、学校生活全体を通して、人との関わりを大切にしながら学習活動を進めている。

身体と心が大きく成長する中学生時代に、自分らしく成長する一つ一つの過程を大切にしたい。単に基礎的な知識や生活技能を高めるだけではなく、その知識や技能によって生活経験を広げ、自信を深め、社会の一員として自分らしく生きていける力をつけてほしい。

キャリア教育に取り組み、研究３年目となる今年度も、これまでの研究成果を踏まえながら、さらに生徒のキャリア発達を促すことができる授業作りを考えてきた。

（２）教育課程の特徴

本校中学部ではグループ学習を実施している。今年度のグループ分けは表Ⅱ－２－１のようになっている。

表Ⅱ－２－１　今年度の作業学習と生活単元学習Ⅱのグループ

主な作業学習の内容	生徒たちがつけたグループ名	１年生	２年生	３年生	人数
自転車の整備・点検	ラビットシックス	1	2	1	4
ポップコーン製品作り	サンサンポップ	1	3	2	6
紙漉き、和紙製品作り	からあげバス	2	1	3	6

グループ学習は学校生活の様々な場面で取り入れられている。このグループは、作業学習での縦割りグループを基本としながら、生活単元学習や美術、給食指導も行う。そのため様々な領域・教科を合わせて単元化した授業を実施することが多い。そのため表Ⅱ－２－２のように学校行事やその他の領域・教科と関連しているという特徴がある。

表Ⅱ－２－２　作業学習と関連する行事・授業

作業学習	関連する行事・領域・教科	内　容
自転車の整備・点検	サイクリング遠足（行事）	事前の自転車整備（生徒、教師、ボランティア学生分）
ポップコーン製品作り	里山学習（総合的な学習の時間）	トウモロコシ栽培・収穫
	生活単元学習	学習発表会に向けた試作・出店準備
	学習発表会	販売活動（ポップコーン粒・加工したもの）
紙漉き、和紙製品作り	生活単元学習	学習発表会に向けた出店準備
	学習発表会	販売活動（和紙製品）

グループの編成は作業学習の内容を基準に教師の話し合いで決定している。生徒と日々接する中で、作業種の希望を聞くことはあるが、一斉に行う希望調査などは行っていない。作業学習は職業訓練的な目的で行っているわけではないので、毎年グループを変更することもあれば、３年間同じということもある。すべての作業種を網羅的に体験するよりも、生徒の実態に合った活動を実施できるグループ編成が望ましいと考えている。

（３）実践の経緯

①昨年度までの実践

国立教育政策研究所は、中学生段階のキャリア教育のキャッチフレーズとして、「自分と社会をつなぎ、未来を拓くキャリア教育」と示している。３年間の学びの中で「社会とのつながりを持ちたい」という気持ちを育てることが大切だと考えている。それは教え込むのではなく、３年間かけて、自ら思える生徒に育てることが目標である。

中学部でのキャリア教育というと、高等部と連携し、スムーズに移行できるようにすることと考えがちだが、中学部には中学部として大切なことがある。中学生として活動し、中学生として経験を積み、中学生の時代を全うできるような活動として「力いっぱい取り組める活動」を掲げた。こうした活動に取り組むことで、「社会とのつながりを持ちたい」と自ら思える生徒に育てることができると考えてきた。昨年度までの研究の結果、中学部で考える「力いっぱい取り組める活動」についてまとめたのが、表Ⅱ－２－３である。

表Ⅱ－２－３　本校中学部で考える「力いっぱい取り組める活動」

中学生という発達段階に相応しい、リアリティのある活動

・中学生である生徒にとって、真剣に取り組むに値する活動であること
・社会と触れ合うような経験を積めること

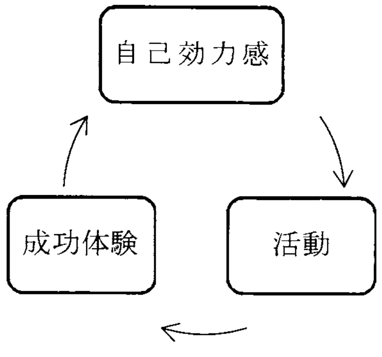
仲間と協力しなければ成し遂げられない活動

・どの生徒も取り組める活動が準備されていること
・それぞれ生徒のよさを発揮する場面があり、認め合うことができる活動であること

一つの活動を複数回繰り返すことができるほどの活動量があること

・達成感があり、自己効力感につながるような活動であること
・活動量の多さ自体がルーティン化という支援を生み出すような活動であること

例えば、作業学習においては、作業をしたいと思える作業にするにはどうしたら良いか。作業をすることで誰かに喜んでもらえる、役に立っている、感謝される等、働く喜びを感じられる作業学習であれば、生徒の主体性は高まると考えられる。また、一つの活動が成功体験となったときに、それが自己効力感につながっていく。そのためには、まず活動の第一歩を踏み出すための原動力が必要である。成功すれば、自己効力感が生まれ、さらなる活動へと続いていく。



中学生らしく「力いっぱい取り組める活動」として、平成 26 年度は一つの学習集団が他の集団を巻き込む形で展開する「めった汁祭り」を実施した。さらに、平成 27 年度は生徒の内面の推察をもとに、力いっぱい取り組めるように学習活動の改善を試みた、学習発表会での「ポップコーンの販売」を実施し、研究として取り上げた。

②今年度の実践

今年度は、昨年度提唱した「力いっぱい取り組める活動」をグループ学習で取り上げた、実践Ⅰ、Ⅱの研究を行った。単元としての授業の構成を大切にして、中学部全体で学習内容や支援の方法等について話し合いながら実践内容を考えていった。実践Ⅰ「ベルを交換しよう」は、自転車の整備・点検グループで実施した単元である。修理を通して人の役に立つというこれまでも実施してきた取組に、「力いっぱい取り組める活動」となる要素も加味した活動である。実践Ⅱでは、昨年度と同様のポップコーン販売を単元として取り上げた。昨年度の生徒の内面に寄り添った理解を助ける取組とは様相を変え、生徒の要求からスタートした単元づくりを心掛けた。丁寧な支援だけではなく、生徒の「やりたい気持ち」によって単元が発展していく実践となった。

授業の内容だけでなく、教師の話し合いによって単元構成を決めていくプロセスについても今年度は大切にした。授業の様子を撮影したビデオなどの客観的な事実をもとに、生徒の内面を推察し、活動内容や支援について協議した。実践Ⅰは長い時間協議を重ねた後に、授業を実施した取組だが、実践Ⅱは授業を進めながら協議を重ね、よりよい活動となるように方向を修正するような取組であった。そうした違いについても考察を行った。

2．実践Ⅰ　作業学習（自転車整備）「ベル交換をしよう」の授業作り

（1）はじめに

自転車整備のグループは年間を通して、作業学習で自転車整備を行うグループ（以下「自転車グループ」）である。整備した自転車は日常的に運動場で乗って楽しむだけでなく、毎年秋に実施されるサイクリング遠足にも使用されるなど、行事にも欠かせないものである。

今年度の自転車グループは、昨年度からこのグループに所属している3年生の女子1名と、今年度から参加している2年2名、1年1名の男子の、合計4名で構成されている。昨年度までは中学部の作業学習3グループの中で一番難しい仕事という位置づけで生徒を配置していたが、今年度からは活動と支援を見直して、これまでは自転車グループに参加することが難しかった生徒も所属できるようになった。

（2）授業の計画と実施

実践Ⅰは、日常的な授業での様子をビデオ撮影し、学部の教員全員で視聴した上で、その様子や中学部として目指したい姿を考慮しながら、単元を計画・実施した取組である。

①生徒の実態

自転車グループでは昨年度までの活動と支援の見直しを行った。今年度の方針としては構造化などを進め、活動をわかりやすいものにし、抽象的な判断が難しい生徒でも主体的に取り組めるようにするというものである。具体例をあげると、昨年度までの活動に項目としてあった「虫ゴムの<u>点検</u>」の項目を「虫ゴムの<u>交換</u>」に変更するというものである。「虫ゴムの点検」ではタイヤバルブの部品である虫ゴムの状態を確認し、劣化している場合は新しい部品と交換するというものである。一方で「虫ゴムの交換」は部品の状態を生徒が判断せず、必ず交換してしまうということで、生徒のとるべき行動は明確である。また、昨年度まで実施していた「修理」の活動は経験や臨機応変な判断が求められるため今年度は実施せず、ルーティン化された「整備」にだけ取り組むようにした。このようにわかりやすい活動に変更することで、自閉傾向の強い生徒でも主体的に活動できるようにした。

写真Ⅱ－２－１　活動的に消極的なA男

こうした活動の見直しにより、活動への参加が難しいと考えられていた生徒も落ち着いて参加することができた。しかし、年度当初に特に支援の必要が少ないと見込まれていた2年生の男子生徒（以下A男）の活動の様子が受け身で、消極的なことが目立ってきた。

年度当初の活動は「整備」が主体であったが、グループとして学校にある自転車の把握ができていないため、自転車の状態を記載したカルテを作る「登録」の作業をする必要があった。A男は3年生の女子（以下B子）とペアとなり、カルテづくりを行う登録の作業を担当していた。B子は活動の内容をすぐに理解し、手際よく登録作業を行うことができたが、A男は活動全体を把握できていないようだったので、ブレーキワイヤーの長さを測る仕事のみを担当することになった。しかし、A男は主体的に行動せず、指示を受けて活動してもすぐに中断してしまう状態だった。だからといって仕事を怠けようというわけではなく、何をしたら良いのかわからないのだと感じられた。（写真Ⅱ－２－１）

そこで、A男の配置を構造化されていない「登録」から、構造化された「整備」に変えること

にした。整備の作業に移っても、最初のうちは教師からの指示が必要であった。しかし、活動の回数を重ねると、教師の指示を必要としなくなり、主体的な活動がみられるようになってきた。また､別の日にＢ子が高等部で授業体験をするために作業グループから抜けることがあったため、Ａ男が一人で登録作業を担当する機会があった。その時に、以前ペアで登録作業を担当した時とは全く違う活動の様子が見られた。カルテの空欄の項目を判断して､必要な情報を自分から集め、カルテに記載していくことができた。このことから、Ａ男は構造化されていないために取り組めなかったのではなく、ペアを組んで作業をすると、相手のことを意識しすぎて、じゃまにならないようにしようとするあまり、自主的な行動に移れないという実態が推察された。

表Ⅱ－２－４　Ａ男の授業中の様子

日付	Ａ男の様子	教師の捉え	支援等
5/19	・登録の仕事を担当 ・行動が指示待ち	・仕事が難しすぎるのではないか	・整備の仕事に担当を変更
5/26	・整備の仕事を担当 ・慣れるにしたがって主体性が増す	・繰り返し取り組める活動ならば主体的に行動できるのではないか	・仕事の範囲や活動内容を明確にしていく
6/28	・登録の仕事を担当 ・Ｂ子がいないため、Ａ男だけで活動 ・以前よりも主体的に活動している	・ペアを組んで活動すると仕事の範囲がわからなくなり、活動できないのではないか ・一つ一つの活動は習熟してできるようなってきているようである	・ペアを組まない方が主体的に活動できる ・説明や図示するよりも、活動を重ねることで習熟していく

②教員間での話し合い

①で述べた実態把握と並行して、中学部の教師全員で、具体的にどういった活動を行う単元にするのかという話し合いも行った。前年度までの授業の実績や中学部として大切にしたいことを考え、その中から生徒の実態に合ったものを取捨選択するというやり方で話し合いは進んだ。

普段取り組んでいる整備や登録など自転車の管理は人の役に立っているのだが、その実感を生徒が得るのは難しい。自転車を利用する側も、自転車が乗れる状態なのは当たり前で、それを維持する活動のありがたさはあまり感じられない。

そこで、昨年度と同様の修理活動を実施できないかという意見が出た。昨年度まで行っていた修理活動では、故障が直るというわかりやすい成果があり、人の役に立っているという実感も得やすい。しかし、技術的に難しい上に故障件数も少なく、習熟するのが難しい。今年度からは、それまで自転車整備のグループへの参加が難しいとされていた生徒がメンバーとなっているため、昨年度並みの修理を実施すれば、教師が修理するのを手伝う程度の活動しかできず、生徒にとって「自分の活動が人の役に立った」という実感を得るのが難しいと予想された。

日常的に行っている整備などの自転車を管理する仕事の意味を、説明などの座学を通して学ぶのはどうかという意見が出たが、生徒４名のうち３名は自閉症との診断を受けているため、口頭の説明が適切な指導方法とは言い難い。自転車を紹介するような掲示物の作成という案もあがったが、役に立っている実感が乏しいのではないかという意見があった。

さらに、視点を変えて、友だちとの協力を通して生徒のキャリア発達を支援するという案が出た。これならば活動を選ばないので、技術的に容易な活動を協力して行うこともできる。しかし、A男の実態で述べた通りペアで協力する活動にすることで、生徒の主体的な活動が阻害され、活動量が減少し、「確かに仕事をした」という実感が失われることが予想された。ここまで、既存の活動の中から考えていったが、問題点を考えていくことで話し合いが行き詰まってしまった。

そこで生徒にさせてみたい活動をするためにはどういった問題点が解決されていればいいのかを考えてみることにした。

構造化された状態で主体的に整備活動に取り組む

- 活動している実感がある
- キャリア発達支援を行う活動としては不十分

昨年度並みの修理を通して働く意味を学ぶ

- 人の役に立っている実感を得やすい
- パンク修理などこれまで実施してきた修理は、技術的に難しい上、習熟できるほどの件数もない
- 自転車の状態は個別性が高く、構造化などにより技術的困難さを軽減するのが難しい

活動の意味を座学で学ぶ

- 日常行っている活動の意味が理解できる
- 口頭での説明では理解の難しい生徒が多い

友だちと協力して整備

- これまで大切にしてきた活動である
- 協力が活動の阻害因子となる生徒がいる

↓

ベル交換作業

- 修理した成果がわかりやすい
- 故障件数が多く、活動自体で習熟できる
- 汎用的な技術で対応できる

人の役に立っていると最も感じられる活動が修理であろうということは、それまでの話し合いでも共通理解されていた。パンク修理などの活動は手順が多い上に汎用性の低い技能が多く含まれ、故障件数も少ないことから、視覚化やルーティン化など活動の構造化が難しい。それならば手順が少なく、汎用性の高い技能のみで実施でき、件数も多い自転車の故障がないかを考えてみた。学校にはベルやライトの故障している自転車が多いが、公道で走行する機会がないため故障は放置されている。ライトの修理は車体による個別性が高いのでパターン化するのが難しい。一方、ベルの修理は一律で交換するということになる。ベルはビス一本で固定されているため、作業手順が少なく、ビスを回すという技能だけで実施が可能である。問題となっていた技術的な難しさも解消できる。こうした条件から、活動としてはベルの交換作業を実施することになった。

③実施した授業

第一次の授業では、登録した自転車のカルテを目にする機会を設け、「ベルを使用できない」となっている自転車が多数あることを教師が指摘した。すると生徒から「修理したい」という言葉が出てきた。ベルを修理するためには、新しいベルと交換しなければいけないということを伝え、購入する新しいベルの個数を調査した。全 46 台中 36 台のベルが使用不能だった。4 人で修理しても繰り返し修理をするのに十分な数である。

第二次は修理の実施で、簡単に見本を見せた後、すぐに作業に取り掛かった。手順が少ないので手順表などは用意せず、活動を通して習熟することをねらった。修理の終了後は実際に自転車に乗り、修理したベルを鳴らしてみる活動も入れた。また、目標を立てて振り返りを行うというプロセスがキャリア発達支援を行う上で重要であるというこれまでの研究に基づき、教師は修理活動の最中に生徒の目標を確認するようにした。目標を達成できたかについては、振り返りで言語化していく活動を取り入れた。

（３）生徒の変容

この授業での生徒の様子は、大変意欲的であったと感じられた。生徒によって自転車の修理台数に開きが出ることが予想されたが、実際には修理台数の差は１、２台で、全員が最後まで集中して活動に取り組んでいた。Ａ男も教師からの指示を受けなくても主体的に活動することができていた。

他の生徒にも良い姿が見られた。最後の１台を２年生の男子Ｃ男が整備していた際、教師の指示でＡ男とＢ子が手伝った。教師が「Ｃ男さんを手伝って。ハンドルを抑えておくとか。」という指示を出したところ、Ａ男はハンドルを抑えるという行動をとった。一方のＢ子は、ハンドルを抑えているＡ男と古いベルを外しているＣ男を見て、次に必要となる、新しいベルをとってきて、仮止めしてあるビスを外しておくという行動をとった。（写真Ⅱ－２－２）このことから、Ｂ子について次のようなことがわかる。教師の指示をきっかけに行動したことから、自主的に友達を助けているわけではない。しかし、相手が必要とすることを的確にとらえた行動をとり、質の高い協力をした。思いやりから相手の必要とすることを分かったのではなく、作業することを通して手順が完璧にわかっているから相手の必要とすることが分かったのだと考えられる。Ｂ子は昨年度の研究紀要にも中学部のＢ子として登場している生徒である。Ｂ子は自分のイメージする良い行動をとろうと常に考えている。Ｂ子は自分が作業を終えた後も働いている友達を手伝う必要性を認識していなかったように思える。しかし、手伝うからには相手にとって最も役に立つ行動をするのが良いと認識しているのではないかと考えられる。したがって、Ｂ子のキャリア発達はベル交換の手順を完璧に理解するという「既有知識の更新」によるものであり、これによって相手にとって最も利益のあると思われる行動をとることができたのだと推察した。

写真Ⅱ－２－２　Ｃ男を手伝うＡ男とＢ子

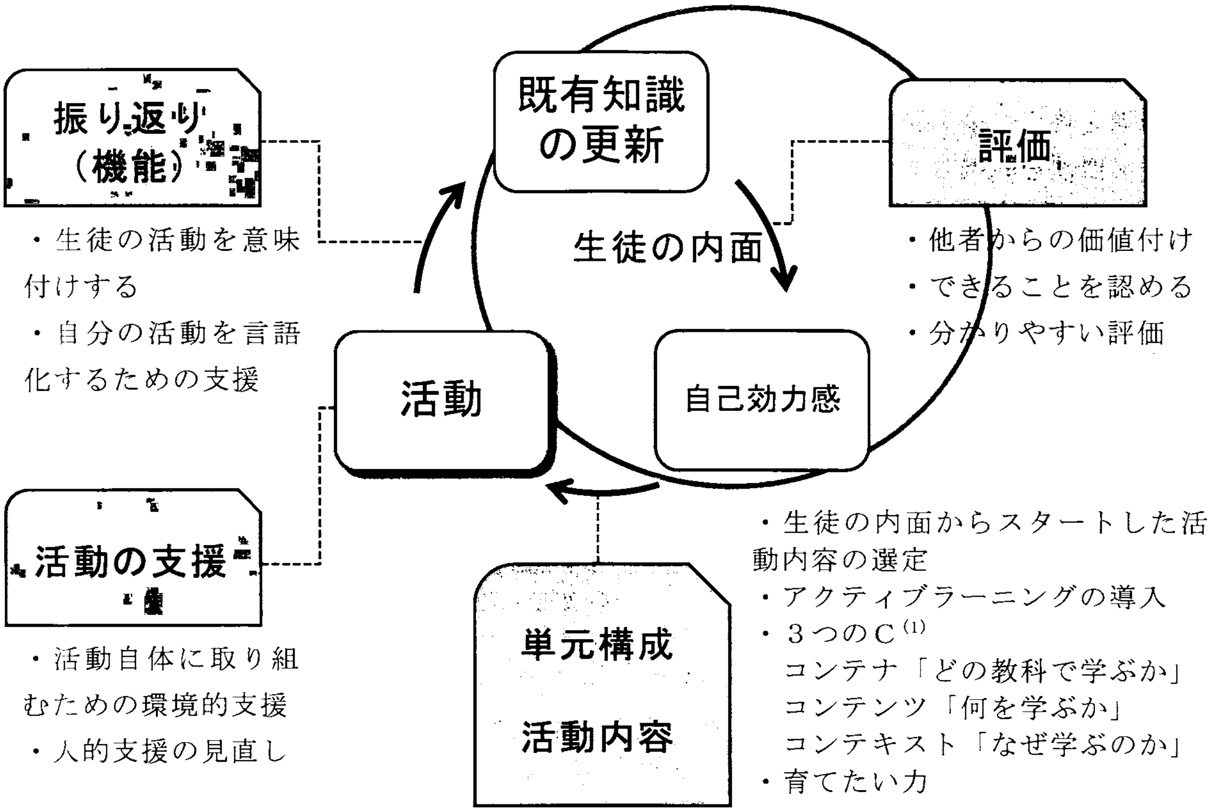
他にもＣ男が休憩時間を取らずに作業を続けたいと主張したことや、１年生のＤ男が作業終了後に「次はタイヤ交換をしたい。」と意欲的な面を見せるなど、普段とは違う生徒の一面が見られたのも、単元の成果の一つだと考えられる。この単元はＡ男の実態から企画された単元であるが、その他の生徒にも成長を感じられた授業であった。Ａ男に対して考えられた支援が、他の生徒にとっても効果的であったということではないだろうか。

（4）まとめ

①課題と改善

この単元も成果ばかりではなかった。授業後に単元の振り返りを行った際、目標を立てて振り返るというプロセスにこだわりすぎたため、振り返りが無意味なものになってしまったという反省が挙がった。当初考えていたのは、技術的にできないことを認識させ、できるようになった成長を振り返りの時間で言語化し、自己効力感を引き出そうというものであった。活動と振り返りの時間のタイムラグが、「できるようになった」という実感を弱めてしまった。むしろ、できるようになったその瞬間にできたことを喜び合うような、振り返りの機能を活動の時間に織り交ぜるような授業展開の方が良いという認識に至った。また、授業の最後に行う振り返りでは、「生徒の変容」の項で挙げた、Ｂ子の質の高い協力などを、他の生徒と共有する時間にした方がよいというような意見も出た。さらに、効果的な活動にしようとしすぎたため、「ベルの交換」という１度きりしか実施できない単元となってしまい、生徒の変化を追っていくような取組ができなかったことも改善すべき点として、夏に行われた研究フォーラムで指摘された。また、そのフォーラムで、単元を計画する際に「ペアでする仕事は主体性を阻害するからよくない」など、問題点から単元を考えるのではなく、やりたいこと、生徒にさせたいことから考えるべきだというアドバイスも受けた。

授業計画段階の話し合いでも改善すべき点が見つかった。例えば「授業で大切にしたいこと」を挙げる際に、どういう意見を出すのかということについて、教師間で見解の齟齬があった。授業の目標について話す教師もいれば、支援について話をしている教師もいる。「活動量を増やす」というキーワード一つをとっても、それ自体を目標だと考える教師もいれば、ルーティン化を実



図Ⅱ－２－１　授業考察のためのマップ

現するための支援の一部だと考える教師もいる。話し合いがかみ合うためには、何を論じているのかを確認し合うためのマップが必要だということになった。そうした指摘から作成された「授業作りシート」のほかに、中学部独自の「授業考察のためのマップ（図Ⅱ－２－1)」も作成し、何について論じているのかを明確にする改善を行った。

②単元後の生徒の様子

研究フォーラムでの指摘通り、単元の中でＡ男の変化を継続的に追うことはできなかったが、２学期以降も継続した自転車整備の作業や生活場面で以下のような変化があった。

２学期に入ると、毎年 10 月に実施しているサイクリング遠足に向けて自転車の整備を実施した。１カ月でサイクリング遠足に使用する自転車、全 33 台の整備を行う。生徒は全員、構造化された「整備」の作業に取り組んだ。Ａ男もペアや役割を変えながら作業に取り組んだ。次にやることを自分で判断することが難しいＡ男にとって、指示をしてくれるＢ子は相性の良い相手であった。初めのうちは受け身で指示されるままに仕事をするＢ男であったが、次第に慣れてくるとやるべき仕事がパターン化されてきて、主体的に行動できるようになってきた。また、慣れることによって効率もよくなり、早く仕事を終えられるようになってきた。それに伴い現れたのが「Ｂ子さん、何かやることある？」という言葉だった。強引に声掛けが必要となるシチュエーションを設定するのではなく､環境を整えて継続的な取組を行うことで､既有知識の更新が起こり、声を掛け合うようになった。このような取組によってより望ましい行動を引き出すことが、キャリア発達支援として重要なのではないだろうか。

また、Ａ男は中学部に進学した当時から遅刻の多い生徒であったが、近頃はほとんど遅刻をしなくなってきた。そうした変化にも、Ｂ子の存在が大きな影響を与えているのではないかと推察している。Ａ男はＢ子と一緒に活動できることがうれしいという趣旨の発言をしており、下校時もバス停までＢ子と一緒に帰ろうと待っている。Ｂ子の存在が学校に来る理由となっていることで、朝早く家を出て、登校する意欲につながっていると考えられる。指導者の立場からしても、Ａ男がＢ子に接近しすぎたり、しつこくしすぎたりすることを注意する場面があり、他人との適切な距離を保つための指導をする良い機会となっている。こうした状況は障害の有無に関わらず、キャリア発達には重要な要素である。このような人間関係の構築も、学校での作業学習なしではありえなかったことを考えると、ただ働くことだけを目標とするのでは、作業学習の可能性を閉ざしているように思える。生活の場としての要素を学習に取り入れていく視点が必要となってくるのではないだろうか。

3．実践Ⅱ　生活単元学習「学習発表会でポップコーンを販売しよう」の授業作り

（1）はじめに

本校中学部では、ポップコーンの栽培活動を総合的な学習の時間に位置付け、角間の里（金沢大学キャンパス内）の畑づくりから、栽培、収穫、一次乾燥までの一連の活動に中学部生徒全員で取り組んでいる。

本グループは、１年生１名、２年生３名、３年生２名の計６名で構成されている。作業学習では、粒はずし、選別、洗浄、二次乾燥、計量、袋詰め、ラッピングの一連の工程に取り組み、収穫したポップコーンの製品作りを担っている。また、このポップコーン製品は 11 月の学習発表会で販売している。

９月中旬、ポップコーンの収穫と一次乾燥を終え、２ヶ月後の学習発表会の販売に向けて、作業学習の今後の大まかなスケジュールの確認と、ポップコーン販売について生徒からの意見を求めた。この授業では、生徒から「昨年より多くのお客さんに来てほしい」「商品をたくさん売りたい」と販売活動に対する意欲的な意見があった。学習発表会でのポップコーン販売を、生徒たちが種々の活動に意欲的に取り組むことができる機会と捉え、本単元を設定した。

指導にあたっては学習活動の中での生徒の発言や行動に注目し、生徒の内面の動きを捉えるとともに、授業後の事後検討会（研究会）で、授業を振り返り次時の改善点や展開を確認していくことにした。

（2）単元の計画と実施

毎年、学習発表会での作業製品の販売を実施している。一昨年度までは、作業学習に多くの時間を割いていたため、ポップコーン販売に関する単元では、店づくりやポスター作成などの準備を中心に行っており、接客についての学習が不足していた。

写真Ⅱ－２－３
学習発表会での販売（昨年度）

昨年度は、生徒たちが自信を持って自分たちの作業製品を販売できるよう、接客についての学習活動に重点を置いた単元を計画・実施した。昨年度本校に入学したＥ子は、他の授業場面で失敗することを避ける様子が見られていた。初めて経験する学習発表会での販売に向けた事前学習では、失敗しないよう、他の生徒の様子を見ながら活動に取り組んでいた。開店準備の他、接客等に関する学習活動を重ね、当日の販売では、笑顔で積極的に客に対応する姿が見られた。

学習発表会での販売に向けた学習活動の中で、販売のイメージを持ち、販売活動や自分自身に自信を持てるようになった結果ではないかと推察した。

今年度、「昨年より多くのお客さんに来てほしい」「商品をたくさん売りたい」という思いを持ったＥ子から「(ポップコーンの) 味を増やしたい」という意見があった。他の生徒たちからも「チョコレート、カレー、しょうゆ、ブラックペッパー…」と、自分の意見を伝えてＥ子に同調する姿が多数見られた。

より多く商品を販売するという目標の達成には、店づくり等の様々な要素も反映されるが、生徒たちの新しい商品への期待の高まりに着目し、本単元では販売する商品に焦点を当てることに

した。生徒が自分の意見を伝えたり、他者のニーズを調査したりしながら、新しく商品化するポップコーンの味を決めていく学習のプロセスを通して、販売活動への意欲をさらに高めることができると考えた。表Ⅱ－２－５にある期待する生徒の姿を引き出すため、単元目標を設定し、種々の活動を取り入れることにした。

表Ⅱ－２－５

期待する生徒の姿	・目標に向かって意欲的に取り組む。 ・課題達成のため工夫しようとする。 ・他者の意見を聞いたり自分の意見を伝えたりする。 ・思い切り取り組む。 ・友だちを意識したり、友だちと協力したりしながら活動に取り組む。 ・達成感を味わい自信を持つ。 ・自分や友だちのよさを知る。
単元目標	・ポップコーンの販売活動や準備に意欲的に取り組む。【関心・意欲・態度】 ・新しく商品化するポップコーンの味について、自分の意見を伝えたり友だちの意見を聞いたり、調べたりする。【思考・判断・表現】 ・喜んでもらえる接客の方法について知る。【知識・理解】 ・店員となってポップコーンの味付けをしたり盛付けをしたりする。【技能】
活　　動	・集客を増やす方法を考える。 ・自分たちで聞き取りして調べる。 ・喜んでもらえる接客を知る。 ・店員として調理したり接客したりする。

単元計画は以下の通りである。学習発表会前の２週間（11 月前半）は、特別時間割を設定し、作業学習ではポップコーンの製品作りを、生活単元学習では新商品（ポップコーンの新味）に関する話し合い（意見交換）や、実際に自分たちで調べる活動、接客についての学習、店作り等の準備を行っていく。

単元計画

生活単元学習	作業学習
第一次　ポップコーン販売について考えよう	ポップコーンの製品作り ・粒はずし、選別、洗浄、乾燥 ・計量、ラッピング
第二次　新商品を決めよう	
第三次　店の準備をしよう	

学習発表会・販売

第四次　店の売り上げを確認しよう
第五次　おつかれさま会をしよう

実施記録

生活単元学習	
９月１５日（木）	ポップコーン販売会議
９月２０日（火）	試食（しお味）
９月２７日（火）	試食（キャラメル味）
１０月１８日（火）	おすすめの味を選択、投票
１０月２５日（火）	新味の決定（投票）
１１月　７日（月）	買い物、ポスター作成
１１月　８日（火）	接客の練習
１１月１０日（木）	会場清掃、チケット作成
１１月１１日（金）	店作り、模擬販売
１１月１３日（日）	**学習発表会・販売**
１１月１５日（火）	片付け、洗濯、売り上げ確認
１１月２２日（火）	おつかれさま会計画
１１月２９日（火）	アイロンがけ
１２月　１日（木）	おつかれさま会当日

作業学習	
９月２９日（木）	選別、洗浄、乾燥
１０月　３日（月）	粒はずし
１０月１１日（火）	選別
１０月１２日（水）	粒はずし＊
１０月１３日（木）	粒はずし＊
１０月１９日（水）	粒はずし＊
１０月２０日（木）	粒はずし＊
１０月２７日（木）	計量・ラッピング
１１月１０日（木）	ラッピング

＊体験入学のため特別時間割で実施

第二次「新商品を決めよう」では、学習発表会で販売するポップコーンの新しい味を決めるために調べる活動を設定した。自分たちのおすすめの味のポップコーン６種を他グループの生徒や教員に試食してもらい、「おいしかった味」に１票投じてもらう。

この 10 月 18 日の授業では、投票してもらう対象を授業者が特定せず、生徒たちからその対象を広げていく展開を期待した。しかしながら、生徒からそのような意見を引き出すことができなかった。結果的には、グループの生徒たちの投票の後、教員にも投票してもらい、次時には他グループの生徒にも試食後、投票してもらうことを授業者が提案することになった。

授業後の検討会では、新しく販売する味を決めるために、試食・投票してもらうという展開に見通しを持てていない生徒がいたことの指摘があった。投票結果を集計する表をはじめに提示し、誰を対象に試食・投票を行うのかの見通しを持てるようにすることが、次時の改善点として意見が挙がった。検討会後の 10 月 25 日の授業では、集計表を提示したことで、誰に試食・投票してもらうか見通しを明確に持つことができるようになり、積極的に活動に臨む生徒が多数見られた。

写真Ⅱ－２－４　他のグループの試食・投票

投票の結果、新商品が「カレー味」に決定したことで生徒たちは嬉しそうにしていた。学習発表会での販売に向けて、ポップコーンの調理や接客の練習、ポスターやチケット作成の活動にも意欲的に取り組む様子が見られた。

（３）単元で見られた生徒の様子

「昨年より多くのお客さんに来てほしい」「商品をたくさん売りたい」から、「(ポップコーンの)味を増やしたい。」という具体的な要求へと変化していった。こうした変化を受けて、生徒が自分の意見を伝えたり他者のニーズを調査したりしながら、新しく商品化するポップコーンの味を決め、販売活動への意欲をさらに高めていく活動を採り入れた。これらの学習のプロセスを通して見られた生徒の内面の動きを推察した。

本紀要では、Ｅ子を例に挙げ、生徒の発言（意見、感想）や行動の様子からの内面の変容を表Ⅱ－２－６紹介する。

表Ⅱ－２－６　Ｅ子の変容

	Ｅ子の発言や行動など	教師の推察
昨年度	Ｅ子は昨年度本校に入学し、初めての学習発表会でポップコーンの販売を行った。 販売に向けての事前学習では、自信の無い様子が多く見られ、他の生徒の様子を見ながら活動に取り組んでいた。 当日の販売では笑顔で積極的に客に対応する姿が見られた。 （昨年度の研究紀要参照）	初めて経験する学習発表会で、昨年度は店での販売についてのイメージが持てず、自分ができるか自信の無い様子であった。 他の授業場面でも失敗することを避ける様子が見られている。 事前学習で接客等の練習を重ねてきたことで、当日の販売では自信を持って取り組めたのではないか。 **【既有知識の更新】【自己効力感の高まり】【自己認識の変化】**
第一次	今年度のポップコーン販売について考える場面で、「昨年より多くのお客さんに来てほしい」「商品をたくさん売りたい」 「(ポップコーンの）味を増やしたい」との発言があった。	昨年度の販売経験を踏まえ、今年度はどうしたらよいかという探求的な課題を見つけることができた。また、その課題達成の方法の一つとして、ポップコーンの味を増やすという解決策を考えるに至ったのではないか。 この発言には、今年の販売活動に対する強い意欲が感じられる。 **【要求】**
	給食後の休み時間には、自分たちが授業で作ったキャラメル味のポップコーンを試食してもらうため、同じグループの友だちと一緒に、他の友だちや教員の方へ張り切って出向いた。	キャラメル味のポップコーンを上手く作ることができたという自信の表れ。 **【自己効力感の高まり】** 自分たちの作ったポップコーンを、ぜひ他の友だちにも味わってもらいたいという気持ちを強く持っている表れではないか。 **【要求】**

第二次	「大人の人が買えるように、ブラックペッパーとかいいかも･･･。」と発言。 自分のおすすめの味として「ブラックペッパー味」を選択した。 グループで選択した６種類のポップコーンを試作・試食し、「小さい子には辛すぎるから･･･。」と「カレー味」に変更した。	昨年度の販売経験から客層も考え、大人が好むであろう辛口の「ブラックペッパー味」を推していた。 試食の結果、予想以上に辛く、小学部の児童は食べられないのではという心遣いから、やや辛みが抑えられた「カレー味」に意見を変更するに至ったのではないか。 **【既有知識の更新】**
	試食・投票してもらう活動では、他グループの友だちに説明して投票用紙を渡したり、開票作業では黒板に記録したりと率先して取り組んでいた。 授業後、「投票はみんなの好きなのが分かるから楽しかった。」との発言があった。	「(ポップコーンの) 味を増やしたい」という提案が実現する活動である。自分の推奨する味は「カレー味」であるが、他グループの生徒や教員の選択によって、どの味が新商品になるのか楽しみにしていたのではないか。 友だちや教員に試食と投票をしてもらう調べる活動を通して、楽しさと自分の提案の有用性を感じることができたのではないか。 **【既有知識の更新】**
第三次	店のポスター作成では、漫画のキャラクターを取り入れ、多くのポスターを作成していた。授業内では時間が足りず、休み時間を使ったり、自宅に持ち帰ったりして、作成していた。	ポスター作成に時間を惜しまず熱心に取り組んでいることから、二年目となるポップコーンの販売に向けた意欲の高まりが感じられる。 **【自己効力感の高まり】**
	接客の練習では、「笑顔で」「はっきりとした声で」「ていねいに」のポイントを意識して、にこやかに取り組んでいた。	昨年の販売経験もあり、接客で気をつけるポイントについては既習事項である。昨年のように不安げにしているのではなく、自信を持てているようである。 **【自己効力感の高まり】(自己認識の変化の結果)**
学習発表会・販売	ポップコーン３種のうち「キャラメル味」の味付け・盛付けを担当した。 タッパーにポップコーンとフレバーを入れしっかりと振り混ぜていた。 客からの注文が続き、急いで調理を行っていた。 販売後、「大変だったけど、楽しかった。」とにこやかに発言。	キャラメルのフレバーがポップコーンによくなじむよう、しっかり振り混ぜることを意識できている。 担当するポップコーンの味付け・盛付けに急いで対応し、客を待たせないことに努めていた。 また調理・販売の大変さは感じつつも、やりきった充実感がうかがえる。 **【自己認識の変化】【自己効力感の高まり】**

第四次	販売の片付けをした後、店の売り上げを確認した。「ポップコーンのカップ販売が増えて良かった。」「コーラが下がったから、カルピスを売りたい。」との発言があった。	総売上げは昨年度よりもやや低い結果となったが、新しくカレー味を販売し、カップの販売数が増加したことに着目することができ、売上げの増加に喜びを感じているようであった。 また、飲み物のコーラの売り上げが下がったことにも着目し、来年はカルピスを販売することで、飲み物の売上げ増を期待しているのではないか。 **【新たな要求】**

（４）単元の評価とまとめ

単元終了後の事後検討会を経て、本単元についての評価を以下の項目に沿って行った。

●単元の目標は適切だったか。目標は達成されたか。

・単元目標（四観点）については、個人差はあるものの概ね達成できていたのではないか。目の前にある販売活動に向けて、新しい商品を販売することに高い意欲を持ち、生徒たちは種々の活動に取り組むことができた。話し合いには及ばなかったが、個々の生徒が自分の好きな味を発表し合ったり、他グループの生徒や教員がどの味を好むのかを調べたりする活動に強い関心を示していた。また、接客についての学習や調理する活動にも意欲的に取り組む姿が見られた。

●授業計画は適切だったか。

・学習発表会での販売に向けた２ヶ月間（９月中旬～11月中旬）に及ぶ大きな単元であった。計画当初、生徒たちが「店作り」についても考え話し合う展開を視野に入れていたが、授業検討会を経て、限られた授業時数の中で生徒たちの関心が高い「新商品を決める」活動に焦点化し、単元構成の軌道修正を行った。単元の中でメリハリをつけることができたのではないか。

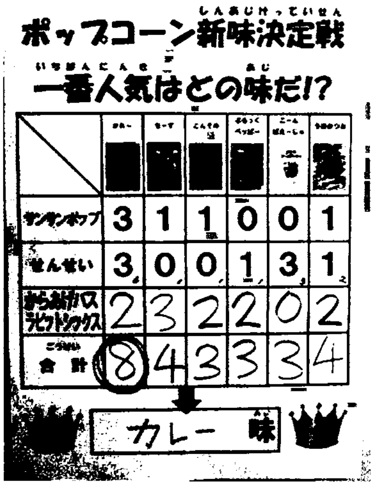
●学習活動は適切だったか。

・自分たちが手がけた作業製品を販売するという目の前の学習活動に、生徒たちは意欲的に取り組んでいた。「新商品を決める」活動は生徒たちも意欲を高め、これに続く種々の活動に対する意欲を持続させることができたのではないかと考える。
・投票という手段で「実際に自分たちで調べる」活動を行い、自分の主観的な意見だけではなく、他者の客観的な意見を得ることを学ぶことができたのではないか。
・昨年度はポップコーンの調理を教員が行い、生徒は会計と販売を行った。今年度の学習発表会では、生徒たちがポップコーンの味付け・盛付けを担当しながら販売した。多くの客がポップコーンを買い求める中、客を待たせないよう担当する商品の調理に熱心に取り組むことが、疲れを感じながらも達成感を得ることにつながったようである。

●授業における教材や手だて、支援は適切だったか。

・10 種類のポップコーン用フレバーから、目を輝かせながら個々のおすすめの味を選択していた姿からも、ポップコーンの新しい味を決める活動は、生徒たちには意欲的に取り組める活動であったと考えられる。

・他グループの生徒や教員に人気の味を調べる活動において、本単元では投票という形式を採用した。ポップコーンの試食と投票をしてもらうという活動の中で、投票の対象を明確にしなかったことで、生徒たちに戸惑いを生じさせたように思う。新しい商品を決定するプロセスを説明するにあたり、投票の対象を明確にするべきであった。授業後の検討会で、投票の対象が一目で分かる一覧表が必要ではないかという意見が出された。後の授業で、一覧表（写真Ⅱ－２－５）を提示した。この表は、新商品決定のプロセスを理解することに有効な支援となった。



写真Ⅱ－２－５
新味候補一覧表

・投票の形式は、開票するまで結果がわからないという期待感を生徒たちに持たせる効果をねらったが、ボードの枠に一人ずつシールを貼っていく形式の方が直接的でわかりやすかったのではないかとも考える。しかし、本校の生徒会役員選挙でも投票という形式を採用していることを考えると、投票がなじみのある手段になっていくことを期待し、今後も採り入れていきたい。

●生徒の内面（要求、既有知識の更新、自己認識、自己効力感）の見取りを妥当に行えたか。授業に反映させられたか。

・２ヶ月間に及ぶ単元を展開していく中で、学習活動における生徒の発言や行動などの様子から、生徒の内面を推察していった。「昨年より多くのお客さんに来てほしい」「商品をたくさん売りたい」「（ポップコーンの）味を増やしたい」という生徒の発言に着目し、多くのお客さんに喜んでもらえるような、新しい味のポップコーンを販売するという活動を実施することができた。（表Ⅱ－２－６）ではＥ子を例に挙げているが、新商品を決定するプロセスにおいて、生徒に一覧表を提示する支援を行うに至ったが、生徒の様子から、投票する対象について見通しが持てていないのではないかという推察によるものである。

「失敗したくない。」昨年度は、初めての活動に見通しを持てず自信なさそうにしていたＥ子であったが、学習発表会に向けての一連の学習活動を通して、自己への認識を新たにし、自信を持ちながら意欲的に取り組むようになった。販売当日には、笑顔を見せながら接客するＥ子の姿があった。

それから一年後、「昨年より多くのお客さんに来てほしい」「商品をたくさん売りたい」「（ポップコーンの）味を増やしたい」というＥ子の発言があった。

昨年度の経験を踏まえ、新たな要求を持ち、本単元での学習プロセスの中で、既有知識や自己認識を更新しながら、さらに自己効力感を高めていった。活動に対する前向きなＥ子の姿勢は、今後も彼女の育ちを促していくであろう。

写真Ⅱ－２－６
学習発表会での販売（今年度）

なぜ、何のために、学ぶのか、活動に取り組むのか。

生徒の学習活動に対する意味や価値、意識の持ちようによって、得られる学習成果は大きく異なる。

生徒たちが学校生活で大きな学習成果を得て、今後の社会生活に生かしていくことができるよう、我々教師には、生徒たちが学習活動に対する意味を見いだしながら取り組んでいけるような学習活動の展開が求められている。

単元目標、授業計画、学習活動の内容、手立てや支援が適切であったか。また、生徒は何を考え、何を感じているのかに着目しながら、日々の授業を見直し、生徒の育ちを促す授業のあり方を今後も探っていきたい。

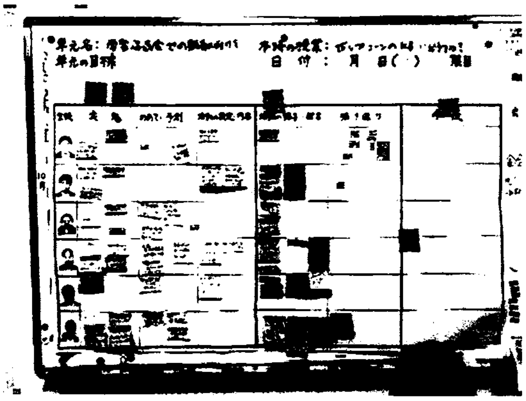
4. まとめ

（1）今年度の取組について

今年度の取組は、複数の授業者が実施する研究授業において、授業研究の一貫性をどのように維持するかが課題の一つであった。実践ⅠとⅡにおいても、中学部では教科・領域を合わせた指導を実施するという点が同じだが、授業した教師も生徒のグループも教科も異なっている。しかし、学部の教師全員で話し合いながら単元を作り上げていくプロセスを経ることで、教師の視点の差異が明確になり、授業改善の視点から、中学部として何に注意して単元を構成するべきかが明らかになってきていた。

実践Ⅰの取組では、生徒の実態と支援の方法を軸に協議を進め、単元を構成することで、活動した実感を十分に生徒が得られるような活動を実施できた。しかし、生徒の思いから出発した取組であったかというと、教師の用意した仕掛けの中での思いの発露であり、キャリア発達支援の視点としては不十分であった。その反省を生かして、実践Ⅱでは昨年度の経験を経た生徒のつぶやきから単元計画を始めた。協議の最中には、「店としてよくするには」という議論に傾きかけたことが何度もあったが、生徒の内面から単元を作るという方針に立ち返り、生徒が活動に対する達成感を実感できるような授業を実施することができた。さらに、単元全体の振り返りを教師間で行った際には、ポップコーン販売をさらに良い活動にするための改善案も出された。

（2）単元計画の協議についての反省



写真Ⅱ－２－７
中学部での授業づくりシートの利用

しかし、その話し合いも議論を重ねてきた中学部の教師以外のメンバーが加わると、成立しないことがあった。実践Ⅱの研究授業終了後の整理会では、中学部としてはその後の単元構成について協議したかったが、中学部以外の参加者から授業の進め方などの指導方法の改善についての指摘が多く、今後の単元をどのように進めていくのかという方向性を決める話し合いにならなかった。また、生徒のキャリア発達のプロセスについても認識の差が大きく、それを埋めることが難しかった。そうした差を埋めるために「授業作りシート」を利用したが、利用方法に対する認識に差があり、多くの時間を費やさなければその差を埋めることができなかった。本校で採り入れている「我々が世の中を見て、何かを見出だす時には、自分たちが既に獲得している知識や概念を通して見ることによって意味を見出している」という指摘は、子どもたちだけではなく、教師間でも同じであるということを忘れてはならない。様々な立場の人が一つのテーマについて話し合える状況を作ることは、協議による授業改善を行うために不可欠な前提である。こうした教師のための環境整備まで含めなければ、キャリア発達支援を行うための取組としては不十分ではないだろうか。

こうした話し合いのための環境整備として、「キャリア発達を促す授業をするには何をすればいいのか」という明確な仮説が必要だと感じた。実践Ⅰでは「活動した実感が必要だ」という仮説があったが、実践Ⅱでは単元の決め方に重きを置いたため、明確な仮説は立てていなかった。議論の対象が明確になることで、様々な立場の人でも協議が成立しやすくなるのではないだろうか。

本校で７月に開かれた職員研修で森脇勤氏から指摘があったように、「～をすればよい」という

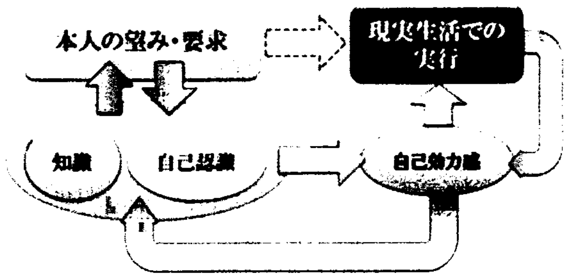
形式化した取組は、時間の経過や担当者の変更に伴い、意味が失われる危険性が高い。しかし、議論の積み重ねによって生徒の内面を推察する立場からすれば、危険を冒しても議論の成立に必要な仮説を立てることを優先したい。時間の経過とともに起こる形式化された取組の空疎化は、その取組が暫定的であることを確認し続けることで回避できると考えている。

（3） 3年間の取組の評価

この3年間の中学部でのキャリア教育研究によって変化したのは、生徒の内面の捉え方であった。社会の一員として自分らしく生きていける力をつけてほしいという願いを、自己有用感や自己効力感を育むことで実現していこうという考えに大きな変化はなかったが、生徒の内面の捉えが変化したことで、指導方法や内容に違いが表れた。

平成26年度の研究では、振り返りを重視していた。意欲を持って活動に臨むということを大切にしてきたそれまでの実践に加えて、活動に伴う自己有用感や自己効力感※1の向上を目指して、振り返りや評価の重要性が強調されるようになった。活動を成功体験に変え、自己効力感を高めるには自己認識や既有知識の更新が必要だが、そのプロセスとして振り返りや評価が有効であるという考えである。他者評価を促す取組としての友だちとの共同作業や、聞き入れやすい評価としてアドバイスをしてくれる地域講師の活用など実践が行われた。自己評価についても、自己選択をすることで目標を意識しやすくなるという認識のもと、自己選択の場を多く用意することになり、学習の導入や振り返りが充実することになった。

・「内面」を構成する要素間の関連



（吉川,2011）

図Ⅱ－２－２　本校における内面の捉え方

平成27年度は「本校における内面の捉え方（図Ⅱ－２－２）」で示すところの「現実生活での実行」にも注目するようになった。研究では、活動に踏み出す最初の一歩を後押しする支援について取り上げた。最初の一歩を踏み出すことで、現実生活での実行（活動）が自己効力感を引き出し、自己効力感が現実生活での実行を引き出す好循環が生まれると考えた。さらには自己効力感が自己認識にも変化をもたらすことで、本人の望みや要求も変化し、さらなる活動を生み出していく。そうした循環を生み出す取組が「キャリア発達支援」であり、そのための有効な指導方針として「力いっぱい取り組める活動」を据えるに至った。

平成28年度になると、現実生活での実行を重視し、その実行の場としての授業を改善する取組を行うことになった。実践Ⅰでは構造化等の支援により活動量を増やし、「現実生活での実行」⇔「自己効力感」の循環によってキャリア発達を促すことを目指している。実践Ⅱでは「現実生活での実行」のきっかけに「本人の望み・要求」を据えることで、さらに効果的なキャリア発達を促す取り組みを目指した。

こうした認識の変化が最も表れているのは、実践Ⅱで紹介したポップコーンの販売である。キャリア教育の研究が始まる以前から取り組んでいた活動だが、内容は大きく様変わりしている。当初は購入者が喜ぶ姿を通して、自己有用感を高めることを目標にし、そのための店づくりやポップコーンの味付けにこだわった活動であった。しかし、その本格志向ゆえの技術的困難さなど

から、生徒の活動内容としては、教師を補佐することが多くなってしまっていた。教師が本格的なキャラメルポップコーンを作り、それを生徒が販売するという活動になってしまっていたが、今年度は生徒の活動を引き出すために、発泡したポップコーンに混ぜるだけでキャラメルポップコーンの味になる粉末を使用した。他者が調理した質の高い製品を販売することと、自分で味付けした製品を販売することならば、後者の方が自己効力感を引き出せるという判断である。

また、学校外の資源を活用しようという取組も変化してきている。これまでは学校外の資源活用としては、外部講師の活用が主となっていた。これは本物に触れることで、憧れを抱いたり自分の将来に期待する気持ちを醸成したりすることや、身につけることで自信につながるような技術を獲得することをねらったものである。しかし、研究を進めた現在、キャリア発達支援における地域資源の活用というのは、社会と交流を通して生徒を育てるという意味合いが強く、外部講師の活用というものが地域資源の活用の一つのあり方に過ぎないという認識に変化していった。

こうした変化を受けて、平成 27 年度末に計画が持ち上がり、28 年度に「地域交流委員会」を創設した。本校の近くに広い境内を持つ寺院があり、毎週水曜日に朝市が開かれている。野菜や果物、鮮魚や佃煮などの販売があり、地域の人がたくさん買い物に来ている。そこで地域の人と交流することを目的とする活動を委員会活動の枠組で実施することにした。委員会活動は月に一度実施しているが、今年度は地域交流委員会が活動しやすいよう、活動日を朝市の開かれる水曜に設定し、その朝市を通じて地域に接することになった。既に人波が去った後の時間帯になってしまうが、思いがけない中学生の訪問に、出店者が優しく声をかけてくれたり、飴やコーヒーを勧めてくれたりもした。こうした出店者の優しい対応にも、当初はどうしたらいいかわからず戸惑う生徒の姿があった。「こんな時は『ありがとう』ってもらえばいいよ」という教師の言葉に、生徒は安堵した表情を見せていた。地域に接することがなければ、初対面の他人に接する機会がないまま、飴をもらってもどうしたらいいのかわからない大人になっていたかもしれない。

写真Ⅱ－２－８　地域交流委員会

近所にありながら、本校の名前を知らない人が何人もいたこともあり、まずは顔を合わせることからスタートした。生徒たちが朝市で買い物学習を行い、気軽に本校に足を運んでもらえるように、夏祭りや学習発表会などの案内パンフレットを配った。10 月からは、作業学習で製作している紙工製品やポップコーンの販売を行っている。さらに朝市の帰りに地域のごみ拾いも行っている。こうした取組も研究を通して教師の認識が変わり、現実生活での実行を重視した結果、その機会を求めて実施に至った活動であると言える。

以上、内面の推察と活動との関係性から３年間の研究を振り返った。「知識・自己認識の更新⇔自己効力感」の循環と、「現実生活での実行⇔自己効力感」の循環のいずれを重視していたのかという分析を試みたが、３年間を振り返って、どちらかが優れているということはないと感じている。活動に踏み出せない生徒に対しては前者が有効であり、意欲にあふれている場合は後者が有効である。しかし、いずれの場合においても、生徒に対する深い洞察が欠かせない。活動的でないからといって、安易に意欲が欠如していると捉えてしまったり、活動的だからといって、活動

の意味まで理解していると勘違いしてしまったりすることは多い。

しかし、キャリア発達を促すような授業をするためには、生徒の存在を念頭に置いて計画を立てなければいけないということは確かである。教師としては自分の判断に責任を持ちつつ、常に判断に疑いに目を向けながら実践に取り組む必要がある。今後の取組としては、教師集団として立てた仮説を軸に、検証を重ねる形で実践を積み上げていきたい。

注

※1 中学部で自己効力感に注目して研究を進めたのは、平成 27 年度半ばからのことである。それ以前はここで言う自己効力感という語句は使用せずに、自信や意欲、達成感などの語句を使って説明している。

参考文献

(1) 菊地一文（2016)「児童生徒のキャリア発達を促す授業づくり」本校研修会資料